地域の底力

地域の宝物を見いだし未来へと歩む岡山県真庭市

山々に囲まれた真庭市に、
新たな風を吹かせたのは、
昔から受け継がれてきた資源と、
気概あふれる人々の心だった。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

廃棄物だった木くずを燃料として活用する真庭バイオマス発電所をはじめ、多彩なのれんが町を彩る城下町・勝山の景色、緑豊かな高原で健やかに育まれるジャージー牛など、多種多様な地域の資源を生かしつつ真庭市はまちの活性化を目指す。

南部、落合地区の春を彩る「醍醐の桜」は、樹齢700年とも1000年ともいわれ、文字通り後醍醐天皇も目にしたとの伝説が残る。県の天然記念物指定。

安定した暮らしのために地域の資源を生かす

東西約三〇キロ、南北約五〇キロ。岡山県内最大の行政地域を誇る真庭市は、二〇〇五年に県北部の九町村が合併して誕生した、人口約五万人の自治体だ。

中国山地のほぼ中央に位置し、小高い山が連なる合間に町や集落が点在。一見、交通の便があまり良くないようにも思える。しかしながら中国自動車道が東西に、岡山自動車道と米子自動車道が結節して南北に走り、岡山市や倉敷市なら一時間弱、大阪までは約二時間で移動できる。

北部の蒜山（ひるぜん）は酪農、その南に広がる湯原（ゆばら）は温泉、南部は農業など、地域により主力産業は異なるが、要（かなめ）の一つは林業。真庭市の八割は森林が占め、江戸時代には木材とたたら製鉄で栄えた歴史がある。

そして現在、国内外の関心を集めるのは、その森林資源を新たに生かした取り組みだ。「里山資本主義」（地域の里山の恵みを活用し、経済再生やコミュニティーの復活を果たす）を柱にまちづくりを進める真庭市の状況を、市長の太田昇氏に伺った。

北部の湯原温泉は宇喜多秀家の母おふくが療養に訪れたなど、戦国時代から湯治場として知られてきた。川底の砂を吹き上げて湯が湧く、川原の露天風呂「砂湯」が人気。

「活性化のために、企業誘致しようにも、ここにさほど大規模な工場ができるわけではない。それよりも地元の資源を見いだし、磨きをかけることが大事ではないか、資源をきちんと生かすことが、地域の豊かさをつくっていくのではないかと思います」

真庭市の場合、その地域資源の一つが木材だ。各地で減少、あるいは消滅している製材所が現在でもまだおよそ三〇あり、植林、育林、伐採、製品化のサプライチェーンが守られてきた。全国平均で四〇％の山の境界画定が、九四％進んでいる状況も、資源の有効活用を後押しする。

「この数字が意味するのは、森林が管理されている、山の木を大事にしてきたということなんです。業界的には厳しいものの、植林をふくめ、真庭の林業はしっかりとまわっています」

特産品の「美作檜（みまさかひのき）」がふんだんに使われた市庁舎が、なんとはなしにやさしい温もりに包まれているように思えてその理由を尋ねると、太田氏が笑顔になった。

「冷暖房はチップとペレットをボイラーでたき、電気は木質バイオマス発電所から引いています。若干の太陽光を含めて一〇〇％自然再生エネルギーを利用しているのは、全国の役所でもここだけだと思います」

市役所の一角、ボイラー室はガ

上／2011年完成の真庭市役所では、庁舎前のバス待合所にCLTを使用。下／市庁舎の冷暖房を担う、ガラス張りのボイラー室。ガラスには、森の木が木質バイオマスとして燃料となるしくみが、わかりやすく描かれている。

京都府副知事を経て、2013年に故郷である真庭市の市長に就任した太田昇氏。「木材業界をはじめ地域を超えた民間企業と、行政との結束力が真庭にはある」と話す。

ラス張りになっており見学ができる。電気をつくるのは、二〇一五年から稼動している木質チップの火力発電所「真庭バイオマス発電所」（真庭バイオマス発電株式会社）だ。真庭木材事業協同組合をはじめとする林業関係者に加えて、真庭市も株主となっている。

「最大出力は、一般家庭なら二万二〇〇〇世帯分に相当する一万キロワット。そのうち約一〇〇〇キロワットを所内の動力として使用し、残りの九〇〇〇キロワットをPPS（特定規模電気事業者）に売却。一カ月で二億円ほどの売り上げがあります」

発電所を訪れた際にそう説明してくれたのは、大学の工学部を卒業後、大阪のポンプメーカーに勤めていた松原瑞浦（みずほ）氏だ。真庭市のバイオマス発電事業は、人気の高い視察ツアーといった交流人口を増やす副次的な効果も生みだしたが、松原氏もまたツアーがきっかけで転職、移住となった。

景色はいわゆる工場なのだが、一帯は心地良い木の香りにあふれ、しばし不思議な思いにかられたものの、それもそのはず。燃料ヤードには、山の整備で生じる間伐材や林地残材、製材所のかんなくず、水分が多いため利用価値がないとされる樹皮が山積みになっていた。

見学中も、燃料を運ぶトラックが次々と到着し、製材所や林業関係の業者が燃料を運び込む。以前は廃棄物だったものが、新たな収入とエネルギーを生み出しているというわけだ。

大切に使い切れる資源 木の時代がやってくる

真庭市のバイオマス事業の扉をまさに開いたのは、「真庭バイオマス発電所」の筆頭株主でもある大正十二年（一九二三）創業の銘建工業代表の中島浩一郎氏だ。

中島氏が最初に一七五キロワットの木質バイオマス発電所をつくったのは、一九八四年のこと。カリフォルニアの小さな製材所で、同規模の発電施設を見学して触発されたのがきっかけだ。

「電気は買うものだと思っていましたから、自分でもつくれると知ったのは大きな転換でしたね」

材料は、製材所の作業で生じる木くずだ。

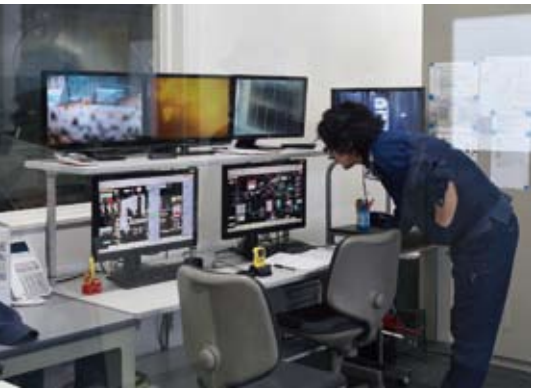
「夜間の電気使用料がほとんど要らなくなり、乾燥用の蒸気も十分確保できるなど、非常に費用対効果がよく、大変気分のいいスタートでした」

その成果を得て一九九八年には二〇〇〇キロワット、そして一万キロワットの発電所へとつながる

バイオマス発電所の炎さながらに、熱いエネルギーにあふれる銘建工業代表の中島浩一郎氏。バイオマス発電所は燃料となる木くずの確保を含めて各所で人の手を要するため、新たな雇用が生じるメリットもあるという。

右／真庭バイオマス発電所の松原瑞浦氏は、市主催のバイオマスツアー参加で初めて真庭を訪れた。中国勝山駅に降り立った際、木の香りに包まれたのが忘れがたい記憶だとか。
下／銘建工業の作業工程で生じる木くずと、それを圧縮して作ったペレット。日に130トンほど生じる木くずが、ペレットの製造や、2000キロワットの自家発電に再活用されている。
（写真提供：銘建工業）

銘建工業のCLT製造を担う大断面事業部の若手のひとり、宿輪桃花氏。山口大学を卒業後、銘建工業の先進性に関心をもち就職。真庭での暮らしがはじまった。



左／繊維が直角に交わるように木材を重ねたパネル状のCLT。ヨーロッパでは既に、高層建築にも利用されている。下／真庭バイオマス発電所内の中央操作室。24時間体制で、ボイラーやタービン発電機などの管理を行う。

が、中島氏が、幾度となく口にしたのは、「あるものを使い切る」という表現だった。

「本来、日本人はものを全部使い切るのが上手な民族のはずなんです。ところが一九六〇年代後半、オリンピック前後から木材需要が急激に増えて供給が足りなくなったことで、道を見失いました」

国産の木材価格は上がり、需要に応えるためコストが安い輸入材が重宝される。伐採と成長のバランスを考えつつ森林を育ててきたヨーロッパとは対照的に、日本は目の前に資源があるのに使われないままになり、山は荒れていく。その状況を変えていったのが、中島氏だ。

バイオマス発電と同様に、中島氏が長年取り組んできたのがCLT（Cross Laminated Timber／直交集成板、繊維が直交するように木材を重ねて密着させたパネル）だ。コンクリートよりも軽く、断熱、耐火、耐震性にすぐれているため、ヨーロッパでは一九九〇年代から注目されている。中島氏の活動を後押しするべく、真庭市では全国初のCLT市営住宅を二〇一五年に完成させるなど、先駆的に導入を進めてきた。

日本でもようやく国が動き、オリンピックの舞台となる新国立競技場の一部にも使われる予定だ。二〇一六年度初頭には国交省の建築基準法に基づく強度等の告示があり、高層階の建築にも対応できるようになった。そのための新工場を二〇一六年四月に立ち上げるなど中島氏の先駆的な試みに惹かれ、県外から就職した若い技術者も多くいる。

中島氏の言葉からは、あふれんばかりのバイタリティーが伝わってきた。

「バイオマス発電、CLTを含めて木材の多様な使い方は、これからますます広がる。人の生活にとって、木はコンクリートよりもやさしい。二一世紀後半は、今よりも木材を使っていることは間違いありません。ほかにはない、再生可能な資源なんですから」

エネルギー問題や資源の利用。日本の未来に関わる試みが、真庭市で実践されているといっても過言ではないだろう。

太田市長もまた、こう語っていたのが印象に残っている。

「地域の資源をうまく使うことが安定的な社会をつくり、ひいては地域の魅力につながると思います。一九世紀は鉄、二〇世紀はコンクリート、そして二一世紀は木の時代なんです」

貫いた信念がほかとの差別化を生む

真庭市の里山がもたらす恵みは、木材だけではない。北部の蒜山では、ジャージー牛が実りをもたらしている。

蒜山酪農農業協同組合顧問の石倉健一氏によれば、蒜山高原でのジャージー牛の歴史は一九五四年にさかのぼるという。

「当時の国の方針で、北海道から九州まで、全国数カ所にジャージー牛が導入されたんです。価格が安い、防疫関係で扱いやすい、牛自

蒜山酪農農業協同組合顧問の石倉健一氏。代々受け継がれている組合内の青年部が、酪農家や社会人としての意識を若手が学べる場になっているという。

組合が経営する「ひるぜんジャージーランド」では、牛乳・ヨーグルト・ソフトクリームなどの加工品を販売。レストランでは、ジャージー牛の肉料理も食べられる。

体が小柄で順応性が高いなどのメリットがありました」

しかし、経済性にすぐれた大型のホルスタインがやがて全国的に主流となるにもかかわらず、蒜山にジャージー牛が残ったのはなぜなのか。

「蒜山地区の人間性だと、僕は思います。真面目なんです。県の指導でジャージー牛を入れたのだから、なんとか続けようと。原野の開墾から始めて牧草を育て、牛とつきあってきたのも影響しているかもしれません」

やがてヨーグルトがヒットし、ジャージー牛の存在は広く知られるようになった。原料の牛乳は瓶の上部にクリーム成分が浮くほど濃厚で、ふっくらとしたおいしさがある。一度味わえば、忘れがたい印象を残す。

ほかの地域との差別化とその品質を保つため、組合が設けた基準は厳しい。

「おいしい牛乳を搾るために、まず蒜山産の牧草をたくさん食べさせてください。そのためには、牧草地の土壌診断や牧草の成分検査をしましょうと」

牛乳の成分も検査し、牛舎や飼育環境もくまなくチェックされる。

「点数化して公表するんですよ。厳しい分、基準をクリアした牧場には組合から余分に利益を分けています」

生真面目な姿勢は、後継者にも受け継がれているそうだ。

「若い人でも、はやりのものにぶれない。代々やってきたのだから、僕らはこれで行くと」

いったん歩みだしたら振り返らず、がんこなまでに努力を重ねる蒜山の気質は、今後も引き続きおいしさを生むのだろう。

自分たちが楽しんでこそ町は元気を取り戻す

真庭の資源のなかには、歴史的な景観も含まれる。その代表格が、二万三千石の城下町だった勝山だ。メインストリートの出雲街道を中心に、今も武家屋敷や趣のある建物が残る古い町並みが続く。

ひと昔前は人通りも少なくがらんとしていた景色を変えたのが、「ひのき草木染織工房」代表を務める染織家の加納容子氏だった。江戸期に建てられ明治から続いている実家の酒屋の軒先を、加納氏がオリジナルの「のれん」で飾ったのが発端だ。

その眺めに惹かれて賛同者が徐々に増え、現在は約九〇軒の「の

江戸時代から受け継がれてきた武家屋敷や白壁の建物が多く残る勝山の町は、やわらかな景色のなか、のれんの鮮やかな色が映える。

左／「ひのき草木染織工房」代表の加納容子氏は、東京の女子美術大学でデザインを学んだ後、家業の酒屋を継ぐために故郷に戻った。右／1764年(明和元年)築の実家は現在、趣をたたえたギャラリーになっている。

辻本店代表取締役の辻総一郎氏(右)は、伝統的なまつり「喧嘩だんじり」もこの地域の一体感の礎だと話す。姉の麻衣子氏（左）は、岡山県初の女性杜氏。代表銘柄「御前酒」は、勝山藩主が愛飲した御膳酒だったことに由来する。

れん」がそれぞれに趣向をこらして通りを彩る。その景色を目当てに訪れる観光客は年々増加。二〇年が過ぎ、勝山の人の意識にも変化が生じたと加納氏は話す。

「実のところ、私たちはここを観光地にしようと思っていたわけではなかった。まちが元気になれば、と思っただけなんです。お宅ものれんをかけてほしい、というお願いは一度もしたことがありません。そうしているうちにデザインというものを、まちの人もだんだんわかってきた。感覚がとても発達したと思います。そしてそれぞれに、のれんや町並みに思い入れも深まっています」

まちの活性化を考えるため、加納氏をはじめ有志が集まってはいたが、その目的はなによりも自分たちが楽しむこと。今も当初の目的は変わらないまま、定期的に集会が行われる。

その集いの場を彩るのは、地元の蔵元、一八〇四年（文化元年）創業の辻本店が醸す「御前酒」。多彩に旨みが煌めいて魅せ、名残のキレの良さにふたたび手がのびる。宴がつい長くなるおいしさだ。

現在は代表取締役の辻総一郎氏と杜氏（とうじ）を務める姉の麻衣子氏が、長い歴史を背負う。ふたりの父親、先代の辻均一郎氏は、まちづくりに尽力した加納氏の同志だった。

「最近は、移住者も増えてきた。勝山は外から来た人を受け入れる土壌があるようです」

勝山の現状を伺うなか、麻衣子氏の話は、正直なところ意外だった。城下町には、保守的なイメージがあったからだ。

「まちづくりが、住む人の意識を変えた。外の人に入ってもらい、まちに刺激を与えた方が豊かになるという、うちの父や加納さんたちの考えが少しずつ根付いてきたのだと思います」

人がまちをつくり、まちがまた人を育む。加納氏が話していた、デザイン感覚もまた然りだ。

「勝山のまちづくりはやがて、世代交代が必要になる。今はそのはざまです。我々若手は行政が協力してくれることに慣れてしまっていますが、自分たちで汗を流さなければとも思います」

そう話す総一郎氏の言葉にも、実は均一郎氏の面影が隠れている。

合併により真庭市が誕生するはるか前の一九九三年、中国自動車道の完成とその後のストロー現象を懸念して、「二十一世紀の真庭塾」という組織が立ち上がった。均一郎氏や銘建工業の中島氏ら、当時の若手経営者が自治体の境界を越えて手弁当で集まり、東京をはじめ各地から講師を招いて勉強会を開催。それが現在のまちづくりやバイオマス事業が生まれる礎となったのだ。

「夜な夜なみんなで集まって、何かおもしろいことをやろう、というのが勝山のまちづくりのスタート。自分たちが楽しむスタイルです。無理はせず、そのコミュニケーションを守っていくのが、一番必要なことだと考えています」

そんな総一郎氏の言葉をはじめ、真庭の今と過去がつながる不思議な感動を覚えたのは、映像作家の山崎樹一郎氏とのひとときだった。

左／一八〇四年（文化元年）の創業当時の姿を残す辻本店の蔵は、有形登録文化財指定。下／昔の貯蔵庫を「酒蔵レストラン西蔵」として再活用。イベントやライブも行われる。

人の心もまた江戸時代から変わらず

山崎氏は学生時代から京都で過ごしていたが、一〇年前に父親の実家がある真庭市に移住し、酪農や農業など地元と関わる作品を発表している。

脚本、監督を務めた最新作の「新しき民」は、一七二六年（享保十一年）、津山藩内の山中（現在の真庭市北部）に暮らす農民たちが起こした「山中一揆」がテーマだ。

「山中一揆では、約六〇〇〇人が五日間で一とところに集結した。その地域柄は、今も生きていると思います。なにもせずに時を過ごすのではなく、よくも悪くも動いてしまう。何かやってみよう、変えていこう。そんな気概を持った人が多いような気がするんです」

これまでお話を伺った方々の顔が、胸をよぎる。官と民とが手を組んで動いているのが江戸時代とは異なるが、森林同様に人の心もまた継がれているのを実感した。

山崎氏が映像制作とともにトマトの栽培に勤しむ、兼業農家であることにも興味津々となる。

「今後のことを考える中で、表現活動の前に農業をやってみたいなと思ったんです。映像制作も農業も、計算どおりにはならない。自分の思いで動けませんが、だからこそおもしろい」

農業を営んでいるからこそ、生まれるなにかがあるのだろう。

銘建工業の中島氏もまた、農業とつながる未来を描いていたのを思い出す。

「今後、より大規模なバイオマス発電所をつくりたい気持ちがありますが、そのときには農業利用と一緒にやろうと思っています。木を燃やした際に出る二酸化炭素は、光合成に使える。廃熱利用もできる。あるものを使い切るんです」

この土地ならではのもっとも大切な資源は、「なにかしよう」という人の心なのかもしれない。

山崎氏の畑を真っ赤なトマトが彩る、夏本番のこれからの季節、勝山ではのれんが涼しげに風に揺れ、蒜山では緑の牧草を食むジャージー牛から牛乳が搾られる。バイオマス発電所の周辺は、より強く木々が香ることだろう。

その名のとおり、あまたの花が咲きほこる美しい庭のような景色が、真庭市には広がっている。

「真庭市はそれぞれに個性の強い地域が隣接している」と話す映像作家の山崎樹一郎氏。右上／290年前の一揆の様子を描いた「新しき民」は、黒澤明監督の「七人の侍」を思い起こさせつつ、これまでの時代劇とは異なる方向へ進むと、ニューヨークタイムズ紙で評価された。

高さ110m、幅20m。市の中央部に位置する「神庭の滝」は、「日本の滝百選」のひとつ。

蒜山高原のジャージー牛飼育頭数は約2000頭。この土地で生まれ、高原の草をたっぷり食んで育つ正真正銘の蒜山産。標高500mの一帯は夏場、目にも涼やかな草原が広がり、西日本屈指のリゾート地としても知られる。